

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授承認第三五二號
昭和二十五年六月廿五日印刷
昭和二十五年七月五日發行

浄土

第十六卷

第七號

七月號

靜觀寂境

吉田絃二郎

お盆と生盆

佐藤密雄

念佛者の生活

佐藤賢順

阿彌陀經を讀む

藤田寛雅

1950

7

悲母聖愛

門口に母は更けたり盆の月

夏の夕のくれまどつた残照も消え、夜の氣配がひそかに濃くなつてゆく。大きく黄色く月がのぼる。門口に焚いた迎え火の火影ももう絶えて煙さえもかすかなのに、母はまだ家に入りかねて、門口に佇ちつくしている。母情、何を想うのであろうか。若き子を先立たせた母心、黄昏のそのどこからか、子の面影の現われては來ぬかと、合掌してみじろがぬ母の、指先の白きがうすやみの空氣の中に痛ましくも映る。子を先立たせた母情この句の如く切なるを想うとき、幼き子を殘して逝く若き母の想ひ、またこれにもまして悲情ふかきを私はまた感じる。

明治畫壇の巨匠、狩野芳崖の絶筆は、いみじくも「悲母觀音」と名づけられている。まことに世の母の姿は悲母である。母情大いなる愛の姿は、悲しみである。

もろもろの世間に於て何をか最も富み、何をか貧しきとなすか——悲母、家にいます、之を名づけて富めるとなし、悲母いまさざる之を名づけて貧しとなす、とは心地觀經の教である。

『この故に汝等、勤加修習して父母に孝養せよ。かくの如き人は佛に供養する福と等しくして異なることなき福を得べし』と母心、これを悲の一字に現わしたことに千萬無量の意味がある。世の冷たさ、人生の濁りの中にあつても、之を救ふものは悲母聖愛である。こゝに目覺め、こゝに感謝するものにとつて光はあり力は與えられる。(藤田寛雅)

目次

念佛者の生活	佐藤賢順(12)
現實の魚をみる	内山憲尙(16)
東北大の念佛會	(17)
法然上人の眼	小島章見(18)
靜觀寂境	吉田絃二郎(1)
お盆と生盆	佐藤密雄(5)
乙女の信仰	阿川貫達(9)
綠蔭(句)	佐藤治子(20)
會友通信	(25)
阿彌陀經を讀む	藤田寛雅(21)
芝園だより	



静観寂境

吉田 絃二郎

アイルランドの詩人シングに「聖人の井戸」という劇がある。その荒筋を述べると次のやうなものである。

長い年月連れ添うてゐる盲目の乞食夫婦があつた。盲目の夫婦にとつて、ただ一つの願ひがあつた。それは一度眼が開いて、自分の眼で、お互の顔を見たいといふことであつた。

「あたしの顔といつたら、この近郷で並ぶ者もないほどの美しさだ、と、みんながいひますよ」と女房は嬌態を作つて言ふ。

「さうかな。お前そんなに美人かなあ。お前の烏のやうな聲を聴いてゐると、美人とは思へないがなあ。いつたい美人といふものは聲もきれいな筈だと思ふがなあ」

「それや、あたしだつて昔はきれいな聲でしたよ。しかし毎日荒い雨風に吹きさらされて往來に立つてゐれや、どんないゝ聲だつて豪なしになるわ」

夫婦でこんな話をしてゐる時、耳よりな噂が飛んで來た。それは「聖人さまの井戸の水を掬んで、方々の町々を歩いてゐる人がある。その水で洗へば盲目の眼は忽ち開く。そして追つつけ、こゝにもその人がやつて來る」といふのである。盲目の乞食夫婦は小躍りしてよろこんだ。かれ等は開眼した刹那そこに見出すであらう世にも稀なる美男美女を想像したのであつた。

やがて聖人の井戸の水を掬んだ人が盲目の夫婦の前に來て、二人の眼を開いてくれた。

刹那に、かれ等は何を見たか？

世にも稀なる醜夫醜婦の姿であつた。

かれ等は神を呪つた。かれ等は再び盲目となつた。

毎日雨がつづく。久しぶりで「方丈記」を出して讀んだ。昔、中學生のころ讀んだをりは「方丈記」の中に書

かれてゐる天變地異がとても想像もできない事であり、
びつたりとは來なかつた。

だが、大正の大震災、つゞいて今度の戦火をくぐつた
今日から考へると、かつて「方丈記」を讀んで、感じて
ゐたことが上滑りであり、概念的であつたことに氣付く
今は「方丈記」に誌されてゐる事件の一つ一つが犇々と
身にこたへて感じられる。

「方丈記」には先づ安元三年四月廿八日の大火のことが
書いてある。その夜は風が吹いてゐた。戌（午後八時）
の刻のころ都の東南から出火して西北に燃えひろがり、
朱雀門、大極殿、大學寮、民部省などまで一夜の中に烏
有に歸してしまつた。その焔の中に悶え苦しむ都人の有
様を形容して作者長明は「遠き家は煙にむせび、ちかき
あたりはひたすら焔を地にふきつけたり。空には灰をふ
きたてたれば、火のひかりにえい（映）じて、あまねく
くれなゐなる中に、風にたへず、ふきゝられたるほのほ
飛が如くして一二町をこえつゝうつりゆく。其中の人う
つし心あらむや。或は煙にむせびてたふれふし、或はほ
のほにまぐれてたちまちに死ぬ。」と叙べてゐる。わたく
したちが経験した炎の洗禮と比べて見ると感慨ふかいも
のがある。

「方丈記」には更に治承四年卯月の大旋風のことや、同
じ年の水無月のころの都遷りのことが抒べられてある。

嵯峨天皇の都定めから四百年の帝都がにはかに西方の海
近くうつされたのであつた。帝王百官ことごとく新都に
走せ、「世につかふるほどの人、たれか一人ふるさとにの
こりをらむ」といふ有様で、京の家々はこぼたれて船で
淀川に運ばれ、家を取りくづされた趾の土地はたちまち
に畠となつた。「人の心みなあらたまりて、たゞ馬くらを
のみおもくす」とあるが、五六年前の疎開騒ぎに一輛の
馬力を救ひの神と頼んだことも思ひやられる。

さらに「方丈記」には養和のころ二年打ちつづいて飢
饉に苦しんだ時代のこと書かれてある。

京の人々は昔も田舎から食糧を得てゐたのであるが、
田舎が秋の收穫皆無とあつては何とすることもできな
い。今日の竹の子生活をあの時代の人もした。「ねむじわ
びつゝさま／＼の財物かたはしよりすすつるが如くすれど
も、更にめみたつる人なし。たま／＼かふる者はこがね
（金）をかるくし、粟をおもくす」

最初は身の面目を考へ、ためらふてゐた人たちも、つ
ひには家寶までも投げ賣りして、今日一日の糧をつない
で行つた。一搦の米に長襦袢一枚を、一斗の米に紋服一
揃へを渡したわたくしたちの生活に餘りにも近い。

今日のやうな救済組織のない時代であつたので郡の内
だけでも幾萬といふ人が路傍に行倒れとなつて。人柄の
いゝ、上品な身なりの人たちが、門に立つて物乞ひをし

てゐるかと思へば、目の前ではたりと倒れてしまふ。こんな氣の毒な人々の死骸で加茂の河原などは馬や車をやることもできなくなつた。

山の木を伐り出す人もなく、都は冬に入つて薪がなくなつてしまつた。食糧欲しさに、自分の家をこぼちて、薪を作り、市に賣りに行く。しかし、自分にかつげるだけの薪を賣つても一日の食に足る金は得られない。

市に賣らるゝ薪に、赤い丹や、金箔が付いたものが見出された。それは古寺に忍び込んで「佛をぬすみ、堂のものゝ具をやぶりとりて、わりくだけるなり」とある。

ただし、かやうな濁惡の世にも人情の美しさをほめかすあはれな物語もあつた。

夫婦仲むつまじきものでは、愛のまさりてふかいものが、最後まで自分を犠牲にして、相手に物を食はせ、相手を生き延ばさせようとした。そのために妻は夫に先立ちて餓死し、親は子に先立つて死んで行つた。

仁和寺の隆曉法印は無縁の佛となつて行く人々をあはれみ、路傍の死人を見る毎にその額に阿字を書いて結縁した。その數は四五月の間に京の「一條よりは南、九條よりは北、京極よりは西、朱雀よりは東の路のほとり」の範圍内だけでも四萬二千三百を算へたと記されてある。

また「一方丈記」には長承のころの大地震の記録がある。「山はくづれて河をうづみ、海はかたぶきて陸地をひた

せり。土さけて水わきいで、いはほわれて谷にまろびいる……みやこのほとりには在々所々堂舎塔廟ひとつとして、また（全）からず、或はくづれ、或はたふれぬ。……地のうごき、家のやぶるゝ音、いかづちにことならず」と形容されてゐるが、その當座の人心を描き「人はみなあぢきなき事をのべて、いさゝか心のにぎりもうすらぐと見えしかど、月日かさなり、年へにしのちはことばにかけていひいづる人だになし」と言つてゐる。

いつの世も同じことで大正の大地震のをりも、しばらくは世のあぢきなきを觀じて、人の心もいさゝか淨められるかと思つたが幾年を出でずして、人々は無常の姿を忘れてしまつた。「一方丈記」の作者鴨長明はさすがに無常の實相に眼を掩ふことはできなかつた。

長明の出離の念は三十歳餘りからはじまつてゐた。「一つの菴をむすぶ。これをありしすまひにならぶるに十分が一なり。居屋ばかりをかまへて、はか／＼しく屋をつくるにおよばず。わづかに築地をつけりといへどもかどをたつるたづきなし。竹をはしらとして、車をやどせり。雪ふり、風ふくごとにあやふからずしもあらず」これが初期の長明の菴の有様であつた。

さらに五十歳の春を迎へて一家を分で、世をそむけりもとより妻子なければ、すてがたきよすがもなし」と淡々乎たる心情を語つてゐる。

六十の齡に及びて、さらにさゝやかな菴を結んだ。「いはゞ旅人の一夜の宿をつくり、老たるかひこのまゆをいとなむがごとし。是をなかごろのすみかにならぶれば又百分が一におよばず。とかくいふほどに齡は歳々にたかくすみかはをり／＼にせばし」とある。菴の廣さはわづかに方丈、高さは七尺、つぎめ毎にかけがねをかけて組み立て、住み心地が悪くなると、いつでも解き放して、好きなところへ二輛の車にのせて運ぶことができる。

日野山の奥にすみかを定めてからは東の方に三尺あまりの庇をさしかけ柴を折り焚く場所をこしらえ、南に竹のすのこを敷き、その西に關伽棚を作り、北に寄せて障子を建て、阿彌陀佛の繪像を安置し、そばに普賢菩薩を懸け、その前に法華經を置いた。「東のきはにわらびのほどろを敷きて、よるのゆかとす。西南に竹のつりたなをかまへてくろきかはご三合をおけり。すなわち和歌、管絃、往生要集ごときの抄物をいれたり。かたはらに琴琵琶おの／＼一張をたつ。……かりのいほりのありやうかくのごとし」とある。方丈の菴の有様がはつきりうかゞはれる。文中かはごとあるは皮籠、すなはち行李のたぐひであり、ほどとあるは蕨の穂の伸びて荊棘となつたものである。即ち荷物といつては黒い行李三つと、蕨のほどろの寢床くらゐなものであつた。

さて菴のまはりはいかゞであつたか。

「その所のさまをいはば南にかけひあり。岩をたてゝ水をためたり。林の木ちかければ、つま木をひろふにともしからず。……谷しげければ西はれたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤なみをみる。紫雲のごとくして西方ににほふ。夏は郭公をきく。かたらふごとに、しでの山ぢをちぎる。秋はひぐらしのこゑみゝに満てり。うつせみのよをかなしむかときこゆ。冬は雪をあはれぶ。つもりきゆるさま罪障にたとへつべし。若念佛物うく、讀經まめならぬ時はみづからやすみ、身づから怠る。さまたぐる人もなく、又はづべき人もなし。……又ふもとに一のしばのいほりあり。すなはちこの山もりがをる所なり。かしこに小童あり。とき／＼きたりてあひとぶらう。若つれ／＼なる時はこれを友として遊行す。かれは十歳これは六十。」白髮の老人と十歳の稚童はつばなを抜き、岩梨をとり、ぬかごを拾ひ、せりを摘んで楽しむ。「方丈記」一巻は世のあぢきなき悲しみに初まつて、佛に頼る者の無我の樂境を語るに終つてゐる。

シングの「聖人の井戸」の乞食夫婦は眼を開かれてあさましき姿を見ても悟ることができなかつた。

鴨長明ははかなさの人の世のすがたを見て悟りの道に入つた。

今の世の人はそのいづれの道を選びつゝあるか

お盆と生盆

佐藤密雄

一 お盆と生盆

季吟に「まさ／＼といいますが如し魂祭り」とあつて、御盆は祖先の御魂を迎へて「いいますが如く」に仕へまつる行事である。佛教行事ではあるが、今日では、最早正月の神事と共に日本の季節の佛事であり行事である。

日頃家を遠く離れて働いて居る人も、お盆には祖先の墓詣でに歸つて来る。一族集つて老父母を慰め、祖先を追憶するのがお盆である。お盆の十三日に門口に麻柯（あさがら）を焼いて、祖先の迎火とする。家の中ではたなを設け眞菰（まこも）を敷いて精霊棚（しやうりやうだな）とする。其上に先祖代々の位牌をすえ、野菜・果物・菓子・草餅等を供え、十三、十四、十五の三日間各異つた料理を調えて靈膳を供えるのである。盆燈籠をつるし、花を供えて

靈前を飾るが、此はすべて當主が禮服を着て、ほんとうに亡き父母や祖先が「いいますが如く」に給仕するのである。若い當主が父の新盆になれない手つきでまごまごする風景もあるし、器用な瓜の馬などがならべてあるのは、「去年迄叱つた瓜を手向かな」であつて、子を先立てた若い母の精魂がそゝがれて居るのもある。

十六日の朝（又は夕）方に門口で送火をするとお盆は終りである。蓮月の歌に「送り火の火影白みて賀茂川の盆の月夜ぞあはれなりける」と言ふのがある。送火の代表は、京都の東山や船岡山の太文字・船形の火たきである。壯觀ではあるが、そのたちまち點じて、たちまち消えるのは、一種の非壯な感慨を呼び、やがて迎へる秋の物思ひを誘ふ様である。

お盆の行事は、死せる父母や祖先を我家に迎へまつるこ

とであるが、然し、もともとは父母及び七代の父母(祖先)への孝養の行事であるから、死せる父母や祖先等に對する慰靈のみの行事ではないとされる。

孟蘭盆經に「孝順をなすものは、念々に父母及び七世の父母を憶念せよ、七月十五日には十方僧伽に供養して父母長養の恩に報ひよ」とあつて、父母長養の恩に報ひるが本意である。故に父母生存の場合は、先づその父母に感謝するのであるが、此を古來生盆(いきぼん)又は生身靈(いきみたま)と言つて居る。お盆には他家へ嫁いだ娘も孫を連れて歸り來て、子も孫も相寄つて老父母を慰めるのもお盆の重大な意義の一つである。藤原定家の明月記に、天福元年七月十四日の條に、「俗習、父母あるは魚食す」とあるから、當事一般の家では十四日は精進魂祭をして居たが、父母が現存する家庭では、先づ十四日には父母に魚食の慰安の生盆をなし、次で十五日には魚食をさけた祖先への魂祭をしたものと見える。

御盆は孟蘭盆(ウランバナ)の略音で、救倒懸と言ふ意味である。倒懸とは「さかさつるし」で地獄の苦しみである。佛教の起る前からの印度の習慣では、家を繼ぐものは男の子である、其の男子の義務は、父母祖先を祀ることとで祖先への祭祀を絶やさずして、それに依つて祖先の靈が地獄等へ墮落し苦しむことなき様にするのが子孫の義務とされたのである。其處で、祖先をまつるお盆の行事が、印度

で「救倒懸」と言ふ文字で表現されることゝなつたのである。

佛教の御盆も、祖先を祭祀し更に亦た逆縁で親に先立つた子等の靈も祭るのである。そして、救倒懸に相當する行事としては、衆僧供養やお施餓鬼を營む。然し此は、現存者が、死者に代つて、僧に衣や食を供養したり、餓鬼に食を與へたりする佛事善業をなすので、死者は此の善行をなしたことに依つて福位を増進し、佛果を大ならしめるのである。現存者から言へば、お盆に佛事善業を祖先に贈進することになるし、死者側からは、子孫の手を通じて佛事善業を行じ、自身の福位を増進させることゝなるのである。

二 目蓮と其母

尺尊の御弟子に目蓮と言ふ方があつた。此方は舍利弗と言ふ方と並び唱せられる方で、當時全印度に秀才の譽れ高かつた方である。此の目蓮が、尺尊から、世界を觀察する仕方を學んだので、「道眼で世界を觀視して」適ま自分の亡き母のことを思ひその現状を觀察したが、母が餓鬼道に墮落して、欲望に驅使されて居るのを發見して驚き、號泣して尺尊にその救濟方を求めた。

すると釋尊は、「汝の母は罪重くて、汝一人の力では如何とも出來ない。十方衆僧の威力を求めるべきである。七月十五日の僧自恣の日、佛歡喜の日に、百味五果を僧衆に供養

するならば、七代の父母、現在の父母の厄難を除き、現存のものを長養することが出来る一と教へられたのである。

佛教では、地獄や餓鬼道と言ふ世界が存在して居て、其處へ死者が生れ出るとは説かないのである。例へ其様に説いてあつても、理解し易くする爲のことである。人が地獄や餓鬼道に生れるのでなくて、宛もよく働く人にはやがて富貴な生活が現はれ来る様に、惡心で貪欲な行業をなす者にはやがて地獄や餓鬼道の状態が現はれ来るのである。地獄も餓鬼も自分の行業で行ひ現はすのである。目蓮の場合は尺尊から學んだ因縁道理の見方で、母の生前の生活行爲を詳細に研究考察した所、どうしても母の現在は餓鬼道の生活を現じ居るものと考へざる得なかつたので、此を考へ及んで驚き悲しみ、母の爲に善事を營んでその救済をはかつたのであらう。

目蓮は七月十五日に衆僧を供養した功德で、母を救ひ、餓鬼道的生活から、佛道的生活に入らしめ、淨土に行かしためたのであるが、尺尊が特に此の日即ち七月十五日を指定されたのは、この日が佛歡喜の日であり、衆僧自恣の日だつたからである。此日は、印度で九十日の雨期の明ける日であると共に衆僧が尺尊の許に集つて、信者の施物に養はれつゝ九十日間の學問修行を完ふした日である。同時に又、明日から各別に一人一人になつて、十方に佛教を傳道しに出發する準備の出来た日でもあつて、佛歡喜の日と呼ばれ

るのである。

次に此日をば衆僧自恣の日と言ふのは、衆僧が互に反省さんげしあひ忠告しあふからである。最も親しいもの同志で、全く自由な氣持で自己の缺點を述べ相手の弱點を忠告するから自恣と言ふのである。勿論、九十日の修養の最後の仕上げであり、完全に身も心も清淨にして明日から九月の傳道へ向はんとする心がけである。

お盆の十五日は此の様な日であつて、信者達も亦た衆僧が九十日のつゝがなく完成した喜びを隨喜するのであつて此日ばかりは僧俗共に過ちをなすものなく、爲めに地獄の釜の蓋もあくと言説されるのであつて、佛教に取つて全くの喜びの日、清淨の日である。僧は修行し、信者は隨喜して、佛道はさかえるのである。

信者の佛事善業は隨喜である。隨喜は單なる讃助でなく、他の行じた所を自ら行じたとして喜び、更に他人が此れからなすことを援助するには自ら行する思ひで援助するのである。目蓮の衆僧供養が例となつて、今日でも御盆に僧を招き、此に衣や食を供養する様になつたが、此は衆僧の佛道修行の隨喜に外ならない。

そして尺尊が、目蓮に、お盆の十五日の日を選んだのは此が衆僧の佛道修行に隨喜するに、最もふさはしい日だつたからである。

三、自 と 他 と

お盆は父母祖先への慰霊祭であると言つてよい。逆縁の場合、即ち、先立つた子や孫に對する場合も同様であつて然もそれは、死後の世界と現實界との區別を超えて、「まさしく」といいますが如く一魂祭りし、死者の魂を取圍んで一族集ひ一村が踊り止まぬのである。

お盆が民衆の中に年中行事となつたのは、中國からであり、更に中國より以上に日本に於てである。お盆の佛事行事としては、目蓮の母の爲になした衆僧供養が印度で行はれたと思はれるが、中國日本では、お盆の行事としてお施餓鬼が多く行はれる。百味五果を、説法する衆僧に供養するもの、食を餓鬼に施して佛道を行ぜしめるもの、死者に贈る佛事善業である。死者を慰めるお盆に、慰める仕方として死者に代つて善業を積むことは、極めて味はひ深きことである。

佛教者が先亡者に代つて佛事善業をなす時には、代つてなすのであるから、「自分が」とか一代つて一とか言ふ考へがあつては、「我慢の業」となつて何等の効を生じないのである。たゞ心を空しくした善事だけが行はれてゆくのでなくてはならない。父母祖先や逆縁の子等にさゝげ切つた振舞でなくてはならない。

「おせがき」に死者の戒名を書いた塔婆をまつるのは、施

される餓鬼として名を列ねるのではなく餓鬼に施す行事をなすものとして、即ち善業の功德を受けるものとして列ねるのである。「おせがき」に参加した功德の全分が先亡者にさゝげられるのであつて、お参りして居る現存者のものではないのである。然し、みちんも自分の功業とせざるものゝ善業が、其人に取つての眞の善業であることは、改めて論ずるまでもない。

滅多撞く人寄せ鐘や施餓鬼寺

お盆月には、どこのお寺もお施餓鬼でにぎはひます。お盆とおせがき、——本誌に執筆下さつた佐藤先生に、さらに「おせがき」の意味をも説いていただいて、合せてここに

浄土トラクト第三集

お盆とおせがき

一部四圓 送六圓

を近刊いたします。時宜に適した浄土トラクトは發刊のたびごとに、全国各地の方々から好評を得ております。御一讀をおすすめすると共に、同信の方々への施本に御活用下さい。

乙女の信仰

阿川貫達

杉山富子さんは、銚子市春日町淨國寺住職杉山俊光師の令妹である。今より十一年前物故されたのであるが當時私は計報に接して焼香に罷出でたので種々富子さんの人となり行狀信仰等を承りまことに尊い生涯であられたのに感激した。依つて杉山師より富子さんの日記二冊及び詩集帳一冊より抜萃せるものをいたゞいたのでそれをまた抜抄して茲に掲げる。

——日記から——

(9)

昭和十四年八月十四日。目がさめたらまだ薄ぐらい。地獄のかまのあく日だ。人々は死んだらどうなるだろう。肉體はきえても魂と言ふものがある。それがどこへ迷はずに行くか？。自分のは不思議だ。大法輪を読んだ。色々佛教の事について書いてある。爲になる本だ。鬼子母神を読んだ。前世の因縁で人の子を食し自分の末の子(愛兒)を釋迦にかくされて目がさめる。そして子を守るとちかひを

立てゝ人々からあがめられる様になつた。人の事を考へず自分の事になつて始めて母性愛としての目がさめた。私はこういふ神話や佛様のお話を讀んだり聞いたりするのが何より好きだ。深く考へさせられる。

滑川さんから手紙がくる。いつも先をこされてしまふ。増田さんへも書こう。一度出したきりですまない。丈夫でいるかしら？。私は良いお友達を持つたと思ふ。増田さん小川さん根本さん信太さん滑川さん飯田さん皆親切でおとなしい良い人達ばかり。良い人になるには良い友をつくれと言ふ通り何よりうれしい。いつまでも清くつきあつて行きたい。「人と交る久しうして尙初遇の時の如く之を敬す」と孔子は言つた。

頭が少しくさい。おばさんに又あらつてもらふ。尼の生活を見る。髪をおろし男子と同じくなり御佛につかえ信仰に生きる。先生は私を見るたびに村雲尼を思ひだすと言はれた。尼になつたらどん

なにせい／＼していゝだろうと思ふ。何の心配もなくひたすら佛におつかへする。自分のやうなものにはなれない。唯佛を信仰し強く生きようと思ふ。大法輪をよんでいると色々とおぼへよく知識をいれる事が出来る。これからよくよもう。今日も兵隊さんが出征なさる。一昨年（令兄俊光師の出征）を思ひながら萬歳をきく。

停車場の聲につられて思はずも

萬歳叫ぶ兵子の送り

八月十五日。いつもより風がひどい。急に朝夕めつきりさむくなつた。もう秋の時節か。又床の上に蟻が上る。アーズがなくておふにも手がとどかない。仕方なくつぶす。（註、次の歌は横臥せし床上に菓子等あるため多くの蟻がきていつも體をさゝれるので、その折は家人も呼んで始末してもらうのですがこの折はたま／＼家人の戻らない時に歌つたものと思はれます）

はひ上る蟻を殺して南無といひ南無と言ひては又殺しけり

八月十七日

思ふたび此の身心もはてしなきかくなるも運のいたずら

何故になつたぞ足のこの病いつになつたらなほることやら

九月十四日。お父様成田より歸つて来る。栗のおみやげ新栗らしく虫つきが一つもない。十五夜もちきなのに私は……。記念ちやん（姉）に手紙書く、土浦の叔父さんの事考へるとおかしくなる。ほんとにのんきな父さん？ 記念ちやんも笑ふだろ。淋しくてかわ

いそうだ。せめて手紙で笑はせない。でも私のこと思つて色々なもの送つてくれてよく喧嘩したつけ、離れるとほんとに懐しくてたまらない。此の間大阪へ行つた夢を見てとても面白かつた。大きい姉ちやんや記念ちやんや女の人達が皆日本髪にゆつてどうしてあんな夢を見たのかしら。夢の中で辰ちやん（淨國寺の役僧大阪の姉の寺へ隨身中）にも合つた。坂を私が一人で自動車をのり廻し姉ちやんの家に行く所あゝゆかい。

私の夢、夢のお國で行き合ふた。久しくあかね人達が

一度に私をとりまいてかはす笑顔の懐しさ

十二月二十日。目をさましてぼう然とした。さめたばかりの夢を追うやうに目を大きく見開いたまゝ眞白な天井をじつとみすくめたまゝ……「目をつむつて何時か自分は夢の中に存在していた。そして南小學校の運動場をあてもなくハナヲの切れた下駄をはいてぶら／＼と歩いてゐた。どうしてもそんな所に居たか？ 何時の間にかたくさんの人がわけもなくわい／＼して運動場につめかけて騒いでゐる。その時自分はすべり臺の所に友達と立つてゐた人が病氣になつて皆ばた／＼死んで行く、しかも此の學校でだ。今子供が大聲でウワ／＼と苦しそうに泣いてゐる。犬の鳴聲もそちこちできこえた。その聲の大きい事天をつくやうな今にも此の世のなくなりさうなものすごいと言ふより恐しい「誰か、火星と云ふ星の落ちて來た時の文章を書いた有様、馬はいなゝき犬はほえ」此の様な事だつたらう

私は何とも言えない感情が胸が一杯にこみ上げて來た。子供の泣き聲たくさん犬の吠える聲、息をのんで遠く離れた所の様子うかがった。どうなるか？ 私は自然と両手がくみ合はされひざまづいて南無阿彌陀佛と唱えた。あゝ阿彌陀様どうぞ此の場をおすくひ下さい。此の事だけはつきりとおぼえてゐる。すると子供の聲も犬の聲も一せいに静まり私もほつとしてかゝあゝあの子も死んでしまつたのか。すると男の人の聲あり續いてバツと火が家屋にはなたれた順々に私の居る方へもうつるが、そのうつり方が電氣を付けたやうに、見るまにバツと明るくなつたと思ふと燃え出した。逃げなければ自分も焼かれると思ひつき、友の手をひつつかんでどての上へ仲々足がはこばれない。上つて思はず深い／＼ため息が口からもれと同時に友の顔を見た。今までちつとも氣がつかかなかつたが、鈴木みつえさんだつた。友はあきれたやうに私の顔を見つめてゐる。とう／＼阿彌陀様の爲にすくわれた嬉しさ。焼け落ちて何もかも清算され終はる校舎を見つめたまゝぼう然と眺めて居た。外の大勢の人達もほう心したやうにぼんやりと校舎にむかつて立つて居た。

十二月末日

もどり來ぬ十四年の一時を時計きゝつゝふりかへりみる
うすぐらき燈を見つめつゝ我思ふはかなき年よ十五十六

詩集帳より

舊蹟を訪ね得ずして去る我は何時か來ようぞ修禪寺の春
留守ならで足うづくたび父と呼び母と呼びつゝ我は泣きなむ

盛り過ぎ散り行く花を見をさめてめぐりくる春我は待ちつゝ
せつかくにこれまでなつたかひもなく根切り虫食はかなき命
月の夜虫の聲間に合はせつゝ經をさうひぬ幼子の聲

大きくになるにつけても謝するもの海山深き父母の恩かな
友の母此の世を去りて我は今たづねし友をなくさめぬつゝ
みとらるゝ我れいえし時同病をみとるゝ白衣今更思ふ

此外に尙數多い胸せまる歌を拜見しましたが是で擲筆致します。
以上は原文のまゝを掲げました。

令兄俊光師より次の記録が添へてありました。是亦原文のまゝを載します。

富子は辨忍師（師父）五女、小學校二三年頃より身體弱く昭和十三年足の病におかさる。（結核性關節リウマチ）其間身體弱き爲高等女學校へは行かず尋常高等小學校に通學せり。病におかされてより温泉がきくとのことで兩親がせおい伊豆修禪寺に療養せるも良くならず、一ヶ月餘の後歸寺、以來方丈の一室にて三年間全然立つこと出来ず横臥せるのみ。その間讀書、人形造り、歌を讀む等を樂みとす。大法輪等を樂しみに讀みたる如し。

昭和十五年一月廿六日頃より病狀惡化重體となり廿八日家内一同に會ひ別れの挨拶後母の名を叫びつゝ午後六時半寂す。臨終時別室の内佛にて、父辨忍師念佛を唱ふ。その聲を聞きつゝ母にいだかれ稱名の後瞑目せり。行年十七歳。

法名 持法院溫譽心光富善大姉

念佛者の生活

法然上人
法語私釋 (六)

——たゞ念佛申すもの往生はするぞ——

佐藤賢順

魚をくう者、往生せんには、鵜ぞせんずる。魚くわぬ者、せんには猿ぞせんずる。くうにもよらず、くわぬにもよらず、ただ念佛申す者、往生はするぞと、

源空はしりたる。(勅佛御傳卷第二十二)

少し回顧的になるが、今から十五年ほど前、われわれ同信が結束して法然上人鑽仰會を組織し、「淨土」を創刊して信仰運動に發足した。この運動は、長い間の全國同信の待望に應えた運動であつたから、たちまち一宗内外の有形無形の援助や協力を得て、すべり出しも滑らかに、活動はたちまちのうちに全國に展開した。その頃、法然上人の思想や人格に深く傾倒している人達を招いて、座談會を開くことが、しばしばあつた。ある時——たしか昭和十年三月の初め、みぞれの降る寒い晩であつたが、ある席に、中里介山氏を招いて、一夕を語り合つたことがある。みぞれの音がしきりに窓外の竹林を騒がせていた。介山氏は、今はも

う故人となつてゐるが、「大菩薩峠」の作者として名高く、「法然」と一黒谷夜話との二作で、法然上人についての並々ならぬ信頼と、淨土教の信仰とを示していた。主人側としては、當時の増上寺法主大島徹水老師、眞野正順氏、中村辨康氏など、それに小生も末席に列つた。

體軀偉大の大島老師は、童顔に微笑を浮べて、始終聞き手役で餘り語られなかつたが、眞野・中村兩氏が相手役になつて、一座は話から話へと、話に花が咲いて興の盡きることがなかつた。話は宗教と文學というような事が主題であつて、中里氏は「法然」や「黒谷夜話」を書いた経験から、法然上人のような圓滿な人格の文學的表現が如何に困

難な仕事であるかを細々と語つた。

——たいていの人は、いくら偉いといわれる人でも、その人のはらの中を極めてみれば、大てい底が知れるものですが、法然上人は全くどこまで深いのか計り知れません。これほど偉大で圓滿な人格になると、文學として表現するのが極めて困難です。親鸞聖人には文學化、戯曲化のやまになるような破亂があつて、女性が出てくる所がありますから、なんとか書けないこともありますまいが、法然上人の御一生には、全然それがない。文學として描けるのは、せいぜい文覺上人位までで、日蓮になると、迫害や法難の場面はあつても、だいぶ難しくなります。

——熊谷直實（蓮生坊）が法然上人に無條件で頭を下げたように、私も上人には無條件で頭を下げます——。

介山氏はこんなことを語つた。そしてその時、話題の一つとなつたのが、この初めに掲げた一魚をくう者、往生せんには……の法語である。

介山氏はこの法語についてこう語つた——これは全く革命的な言葉で、今でこそ出家が魚や肉を食つたからといって、何のこともないけれども、その頃としては、これだけ思い切つたことは、なかなか言えるものではありません。こういう信念は舊佛教——奈良や比叡山の古い傳統的な、形式佛教に對して、深刻な刺戟を與え、動搖させたに相違ありません。全く革命的な言葉です。——

x

全くこの言葉は當時としては革命的であつた。舊佛教が新佛教に轉移したということは、自分で難しい修行をして悟りを開らくことを宗教であると考える自力の立場、戒行の立場から、そういう自力の修行を一切捨て、佛の本願に隨順し歸命して、佛の救いにあらずからうとする他力の立場に移ることである。戒行の道を捨てて信仰の道を選ぶことである。なるほど自力の修行で悟りが開らけ、宗教上の目的を達することができれば、こんな結構なことはい。しかしそれは實に困難な苦勞な道で、菩薩行といわれるような數々の修行を長い長い間重ねなければならぬ。それができればこの上もないけれども、できなければ、それは、いきおい觀念的になり形式に慣れやすい。そして本筋を忘れた戒律の末筆に拘泥することになりがちである。肉を食わぬとか魚を食わぬとかいうことが、肝腎の宗教上の目的達成の條件であるかのように考えられてくる。自力の修行ということの主眼とする限り、これは當然であるが、困難な修行の道を歩まず、佛の大慈悲を信仰してお救いにあずかろうとするならば、戒律の末筆に拘泥することは、全く意味がないのである。佛の本願力を信ずるか否か、念佛を稱えるかどうかによつて、その人が救われるかどうかと定まるのである。

「本願に乗ずるは信心の深きによるべし」（小消息）とある

通り、佛の大悲力に救われるのは、信仰の決断によつてのみ可能である。そして信仰の決断ということは、人間の、他の人ではないこの人間の、私のほんとうの姿の見定めがついた時になされるのである。人間性の豊かな内容、知識や道德その他の諸方面への優れた能力、宗教的には如何なる難しい修行でもできるといふ自信がある間——一口に言えば人間を買いかぶっている間は、信仰の決断の立場へは進めない。自分の姿を「一文不知の愚鈍の身」として、また「罪惡深重の凡夫」として、見定めがついたとき、ひとは戒行などという烏許がましい考えを捨てて、本願に信順するのである。

であるから、念佛者の日常生活には、別段に特に修行とか持戒とかいうことはない。日常の生活そのまま、行住坐臥、舉措動靜そのままが宗教生活である。ただしいつも日常生活そのままが、佛の方へ向けられて、佛の方から導かれて、救いということを中心にして、營まれなくてはならない。

ある時、ある人が往生の用心について上人に次のように尋ねた。

——にらき、ひる、鹿を食いて香うせ候わすとも、つねに念佛は申し候べきやらん。酒肉五辛といつて、にらやんにくのような臭味と辛味のあるものは、酒肉とともに口にしてはいけないうものに教えられてあるので、そういう臭

いものを食べて、まだ臭氣の消えないうちに念佛を稱えてもよいのかと、いう質問である。上人はこれに答えて「念佛は何にもさらぬ事にて候」と仰せられた。念佛は何事にもかかわらない事なのである。

×

この身このまゝの生活の外に、別に念佛生活というものがあるのではない。人里離れた山の中や寺の殿堂の奥にだけ宗教生活というものがあるのではない。このまゝの生活の、このまゝのはかない者を、このまゝの醜い者をこそ、佛の慈愛は包んでくださる。さう確信して佛の方へ向けられた毎日の生活が念佛生活である。

しかしこのまゝでよいからといつて、このまゝということにこだわり過ぎるのは、これはまた本願ぼこりである。本願ぼこりとは佛の救済の力に頼りすぎる結果、人として爲すべきことを忘れてしまうことである。そのまゝでよいというのは佛の側からの言い方で、人間の方からの言い分ではないはずである。佛の側から（すなわち宗教的立場から）いへばそうには違いないが、人間の方からいへば、そのまゝでよいといわれても、そのまゝで済ませてよいはずはない。人間の側から言えば、倫理が必要なのである。泥だらけの手そのままで、合掌するがよい、といわれても、こちらからいへば、淨水で綺麗に手を洗つてから、合掌す

るだけの心掛けが望ましい。にらやひるや鹿を食べて、においの消えぬその口で念佛を申してもかまわないといわれ、口を漱いでから念佛するだけの心構えが欲しいのである。

x

なんと偶然であつたか。こゝまで書いて数日すると家の大掃除であつた。戦争中から一度も手をつけたことのない古手紙や紙屑の整理をしていると、この座談會の夜の「菜單」が出てきた。燕窩玉容とか網油香捲とかその他、常用漢字では全く印刷できないような品名が載つてゐる。これを見て思い出したのであるが、大島老師のためには、特にその夜、精進料理を用意して差上げたのである。老師は浄土門でも捨世派の系統を受けられた律僧で「魚食わぬ者」であつたから。

イ 教 ワ ハ 佛

浄土宗の海外布教は永い歴史をもつてゐるが、戦後ふたたび、その活潑な活動を復活してきたことは喜ばしい。

ホノル、浄土宗別院の藤花教道師の御好意で同師が編集されている月刊「ハワイ佛教」

が贈られてきた。純白の上質紙に印刷された一字一字から、私は海外在留同胞の、しかも永い海外生活、その活動の姿の中に、ふかく生きている念佛信仰の姿を、つよく感じさせられた。最近の同紙から海外の浄土宗に結ぶ人たちの活動を御紹介しよう。そして、さら

に私たちはひろく海外の方々とも、この「浄土」を通じてまたともに語り合いたいと念願する。

x

◇ロスアンゼルス浄土宗別院は、野崎靈海師を中心に、熱心な信者の方たちの涙ぐましいまでの努力が見事に實をむすんで、收容人員六〇〇餘という堂々たる會堂を敷地とともに、西ジェファアソン街にもつこととなり、去る三月廿六日に開堂式・入佛式が莊嚴に行なわれた。本秋には慶讃大法要が嚴修される由。

◇ヒロ明照院では、一萬六千ドル（邦貨約六百餘萬圓）の豫算で、庫裡の新築に着工、その竣工がまたれている。

◇カバア浄土院でも、本堂の改築が熱烈な信徒の人たちの間で決し、その起工準備が着々進められている。殊にここでは、どうしても日系人には日本語を、と在留諸氏の譯から日本語學校が開設された。

内地では國語の混亂が問題となつてゐることを深く省みさせることである。

◇ハマクワ及びハワイの明照佛教青年運動は、戦後たち消えになつてしたが、再び力強く再起して活潑に動き出した。内地の佛青運動の姿を想つてここにも再思すべきものがある。（藤田）

x

x

x

x

のたりの 實現を見 る魚

— 映 畫 時 評 —

内 山 憲 尙

の興味を持つて、封切後六日目に「われ幻の魚を見たり」を見に行く時間を見出した。

×

小夜福子と大河内との取り組みも面白いし伊藤大輔の原作脚色監督と云うのにも心をひかれた。館はさぞかし満員で、立つことを覺悟をして、妻を促し乍ら急ぎ足でやつて來て見ると、切符賣場は案外ひっそりとしていて。一步館内へ入つて見ると、驚ろいたことに樂に腰がかけられたのである。一寸その意外さに啞然としたのであつた。

×

ストーリーは魚のすんでいなかつた十和田湖に十數年間苦心をして、家財を傾けつくし貧苦のドン底に落ちて、マスをも十和田湖に養殖した、十和田湖開發の先達者井内貞行とその貧に甘んじて、夫の仕事を助けて涙ぐましい努力を續ける妻（小夜福子）の熱のこもつた傳記的物語りである。

嚴寒の十和田湖のロケ（石本秀雄のカメラ）に例の大河内獨特の熱の入つた演技、伊藤監督の良心的な取り組み方で、傳記ものとしては先づ大きな非難はない作品である。

盛り上がりがないのと、大河内と小夜福子が少し芝居をしすぎて、あまりに泣く場面が多すぎるが、夫婦愛の美しさに何度か泣かされたのであつた。

×

場内には若い青年男女はいつになく少くまたまた、來ていても、なんの感激もなさそうに見ているのである。

私は考えた、もうこうした映畫からは今の若い者は何等の感激も與えられないのだ。夫の犠牲になつて、夫の苦を共に苦しむと云うことは今の若いものには理解出來ないことかも知れない。「あなたは針です、わたしは糸です。針の進む後から糸はついて行きます、あなたのなさることならどんなことでも、だまつておたすけます」と二度も三度も言われているが、とり様によつてこれを夫唱婦隨的な考え方をするなればそれは封建的であるとも云えよう。

しかし、夫の仕事を妻が助けて、二人が共同で苦しい仕事を切りぬけて行くと云うことは決して時代遅れのことでもなければ封建的でもない。大きな理想に向つて夫婦が手をた

「長期撮影一ヶ年半の結晶成る」「雪中の現地撮影」「大映超大作」「世紀の巨篇、遂に登場」等々の廣告に大きな期待をかけ、多分

づさへて努力し、共同で設計を實行して行くことは、美しい夫婦愛であり、うるわしい人間の姿である。

×

「われ幻の魚を見たり」に對する映畫評を二三見たが、ある新聞のものは「修身映畫であんなくだらない夫婦生活はない」と云う様なことを書いていた。アブレゲールの記者だろう。否この記者以外に同じ考を持つてゐる若い都會の青年男女があることと思う。

結婚を戀愛のみの成果と見、夫婦生活を享樂のみの對象としか考えない若い人たちから見れば、たしかにそうにちがいない。夫に經濟力がなくなればすぐに離婚し、好きで一緒に乍ら厭きが來たらすぐに別れる、アメリカの悪い面のみを、新しいと思つてゐることは間違ひである。

夫の研究の後を引き受けて、ラヂウムを發見した、キュウリイ夫人の様な人のあることを忘れてはならない。

×

大きい人生の理想を見失ふことは、長い人生行路の上から見てどんなに不幸なことだ

ろう。單に一時的な目前の快樂、享樂萬能主義、刹那主義の人生から何が生れるだろう。現實にのみ満足する人生は永久に續くだろうか。

×

「夫唱婦隨」の必要はない「共唱共隨」(勿論こんな言葉はないが)によつて、永久の生命を知つて、共に樂しむと同時に共に苦勞を分け合つて始めて眞の夫婦生活があると云うことだけは、日本の若い人たちも知つていて貰いたい。

×

現實のみを追うものは、理想を見失ない、現實に笑うものは現實に泣くことを知らなければならぬ。

東北大學の念佛會

イールズ問題で、急に有名?になつた東北大學は、何かそんな分子であふれているような印象を與えてしまつたが、眞實に、道を求めてゐる學生諸君の姿をお伝えしよう。即ちこの大學に學ぶ淨土宗關係の學生諸君による

「念佛會」がそれである。

戰前、佛教青年會の運動は、全國的にかつての大學高專に於て活潑であり、相互の連絡もとられていたが、戰爭はこうした青年の眞面目な信仰活動をさえ空白にしてしまひ、戰後の社會は、その空白を埋めようとするものをさえ攪亂してゐる。しかし、地味ではあるが、着實に、たゆみない胎動が各地にきこえはじめてゐるのは喜ばしい。

東北大學では、幸いに宗教學の諸戸・神尾兩教官を中心として、淨土宗學生—小林・佐藤(晋)、佐藤(隆)・村山・諸戸君等(大正大學・佛專の出身者)—が主體になり、仙臺の本宗青年僧諸君と手を結び、毎日曜に市内の本宗寺院が輪番に會場となつて、念佛會がつけられてゐる。

バベルの塔は天に達せずという。論理の階段を踏みかためても、最後には飛翔しなければ信仰には入れない。理性を愛し、知性を誇とする若き諸君が、この飛翔への踏切りのたゆみなき努力こそ、將來を期待させるものがある。(藤田)

法然上人の眼

—畫僧忍海—

小島章見

一、法然上人の肖像畫

胡粉で、うすく彩色をした墨染の天台衣に、大らかなる體軀をつゝみ、その面貌は少しく傍を見かへりたまひ、み手はやゝ胸のなかほどにもたげて、靜かに念珠をとらせたまふ、み影の繪圖こそ、法然上人の最も典型的な肖像畫であります。

この法然上人の肖像畫の構圖は、上人の御存命中に、土佐派の似繪の大家と云はれた、藤原隆信と、その子信實の名筆に成つたものであります。そしてこの構圖は全て法然上人の肖像畫の規範となつたと云つても過言ではありません。

繪畫に現わされた法然上人については、肖像畫と、大和繪風の繪卷物(御繪傳)と、一枚墨摺繪等にわけてこれを考えることができま

信實、土佐吉光、左兵衛源光忠(法名觀空)、及び傳說的ではありませんが、藤法房や宅摩法眼澄賀がおります。また上人の滅後においては、室町時代の西道や、江戸時代の古嗣、海雲等をあげることができます。

二、生命のひとみ

法然上人の肖像畫として有名な、藤原隆信筆の國寶圓光大師眞影(知恩院藏)を拜見します度に思ふことは、宗祖の御人格の偉大なる魅力であります。どこからそれはでてくるのでせうか。法然上人は十六門記によると、日に六萬遍から七萬遍もお念佛を申されたお方だつたとあります。このことはその一つの徴證ともなるでせう。

然し藤原隆信の畫いた肖像畫は、宗祖がお念佛を申して居られるさまを空也上人の彫刻像のように誇張して畫いてはおりません。し

かも拜見するあの念佛に徹せられたみ姿は、なにものにも動ぜざる人格としてののべれます。いつたい、法然上人の肖像畫の偉大な生命は、どこに潜んでゐるのでせうか。法然上人の肖像畫は、あの波濤萬里、海龍を調伏して晩唐の文化をもたらした、弘法大師の肖像畫に現はされている峻嚴な氣魄や、南都、藥師寺所藏の國寶、慈恩大師畫像に窺はれるような高邁な氣品でもありません。

唯だ法然上人の弘法大師と異なり、慈恩大師と異なる宗教的天才の人格の光は、實にあの法然上人の『ひとみ』にあるのではないでせうか。凡そ肖像畫における眼は、最も肖像畫家の苦心するところ です。それなのに往々眞言五祖の影像などをみますと、同じ筆法の調子で眼がとりあつかはれています。然るに法然上人のような眼は他の肖像畫の中から一度もこれを見出すことができません。即ち法然上人獨特の眼であることにお氣つきになるでせう。

この宗祖の眼こそ、全て南無阿彌陀佛の念佛のなかに生かされることを仰信する以外に、なにものも望むことなき眼の光であります。それ故、法然上人の肖像畫においては、宗祖の眼が眞に畫かれていなければだめなのであります。幾千枚これを畫いても宗祖の眞影は躍如として生きてはこないであります。かゝる宗祖の眼を、見逃がさずに、これを畫がきとつた、藤原隆信、信實は、さすが土佐派の繪所預の權威者、似繪の達人だと思ひます。

往古、法然上人の肖像畫について論じた中で、宗祖のこの眼について畫論をなしたものは希有であると云つてよいと思ひます。この點で、徳川時代の淨土宗門における畫僧の一人として、いつも指を

屈される忍海上人は、法然上人の肖像畫における、宗祖の眼について畫論をとばしておりますから、さすが偉い畫僧だと思ひます。このことは、東武泉谷寺の惠頓といふ詩僧の著になる、泉谷瓦礫集の中卷の忍海上人傳に記されてあります。

三、忍海上人

忍海上人は諱を忍海と謂ひ、字は海雲と稱し、寶蓮社雲譽と號しました。また自ら白華無礙子とも號した東都の人であります。青年の頃から常に繪畫を好み、繪の天分が益々ひらめいたので、父は彼を某畫師のもとに學ばしめました。忍海上人が、後日出家の志を發した深い因縁はそうしたことにあつたのです。

それは畫家を志す美貌の青年に對し、こともあろうに師匠の畫師の娘が心を染め、血書の艶書迄も忍海に送つたことがありました。然るに忍海はこれを顧みなかつたため、娘は病にかゝつて、悲願の死を遂げてしまつたのであります。自後、忍海は深更に及んでよく坐してゐる時など、その娘が髣髴として目前に現はれるといふ始末で、忍海の心も患ひ、且つその娘の愛欲沈淪の苦報に、遂ひに彼は世を厭ひて、出家の志を發したといふエピソードをもつた僧であります。即ち彼は愛憐を絶して、直下に彼岸に向つた人だつたのです。

かくして彼は三緣山の鐵舟和尚の室に投じて、受戒し、忍海と號して緣山の北溪に住しました。忍海上人はもとよりその天性に恵まれた畫技を増々みがき、蘭梅の繪に長じ、特に佛畫に妙を極め、淨

土の變相及び諸尊の曼荼羅をよく畫きました。先きに宗祖の眼について重要な言葉を忍海上人が述べたと云ふことを書きましたがそれは次のような簡単な述懐文であります。

『常に吾れ、諸祖の眞を寫貌すること多し。唯だ吾が圓光大師は目精を點するに於て特に不言の妙あるを覺ゆ。其餘の妍蚩は與ることなし』 (泉谷瓦礫集中卷)

實にこの言葉は法然上人の肖像畫にとつて、千金の價值ある言葉だと思ひます。蓋し忍海上人は市肆の畫工と自らその精神を異にし、自分は釋氏の法服をつけた沙門であり、決して畫工の業にのみ従ふものではないといふことを深く認識しておりました。勿論忍海上人の畫いた繪は、皆な獨絶なる氣品があつたと謂ふことであります。

忍海上人はまた律儀にも詳しく、日課稱名三萬遍にも及び、佛像及び道場の壯嚴は三都の精選、四季の珍美を盛り、常に僧家の所有は皆な三寶に因るのであるから、獨り受用すべきではないと云ふ立派な精神を堅持し、且つ貴價物といへどもこれを愛惜するところがなく、誠に師の奉佛は有名なものでした。彼はまた、交道の遠順には常に人情を以つてし、才氣をもつて人を簡傲するようなことを決してしなかつたので、宗徒は親疎なく、知と不知をとはず、皆な師の風采を稱讃したといふことであります。例へば、南郭、服翁、知立、曇海、香山等の儒宗、並びに尊者達と俱に、風塵を蓮社にさけ掃塵會と稱するものを發起し、時の人はこれを廬山陶謝集と呼びました。また彼の藏書、書畫、古器皿、茶道具等、卒ね數世を支へ

るに足るほど蒐集した好き者でもありませんが、これは決して自らがむりをして蒐集したものではなく、列侯、豪富の好き者が皆な一時に相ひ争つて、忍海上人に奉つたものばかりであつたといはれています。併も、忍海上人は敢へて拒まず、欲しがる人あらば、手にしたがつてこれを與へ、その間少しも悋む氣色はなかつたと傳へられて居ります。

晩年の忍海上人の風骨は、全く衣に堪へざるが如き程に瘦せ、清白寡欲、併かもそのうちに溫柔、寛容を持し、年々人生の古淡味を發揮したと謂はれております。そして徳川家治將軍の政治もようやく腐敗し、世に淫靡の風俗が起り、風紀が紊亂をはじめた、寶曆も終らんとする十一年六月十七日、忍海上人は、壽齡六十六歳をもつて、西に向ひ、安然として圓寂したのであります。

綠 蔭

佐藤治子

近づけば人居る氣配若葉かけ
青草を縫ひまひくのまた戻り
忘れられしごと十葉のはびこりて
しづかなる漁村のま晝古簾
發車せるばかりのホーム雲の峰
よしと云ふ百日紅にすみなれて
門しめに行けば薄月遠蛙

阿彌陀經を讀む

藤田寛雅

「ではあなたは地獄をどう思ひますか。あなたにとつて地獄といふものは存在するんですか、しないんですか」それはまるで灼熱した鐵丸でも投げつけるやうな勢ひであつた。

「地獄はどうもあるやうな氣がします」

「ではあなたは地獄に往くと思ひますか」

「私ですか。私は地獄へなど行きません」

と私は、旅行の相談でもしてゐるやうに氣樂に答へた。

「さうですか」と相手の哲學者はたちまちうれしげに顔をかゞやかし、勝ちほこつたやうに斷言した。「さうでせう。あなたはさうでせう。ところが僕は地獄へゆきます。

僕は地獄へ陥ちるんですよ——まるで彼は眞理にみちみちた恍惚の狀態に陥つたかの如く、華々しい狀態で叫ぶのだつた。

しかし、彼を地獄へなど、そうやす／＼とやつてたまるものかといふ氣になつた——私が——先生は極樂へ往きますよ」と言うと、文學者は不機嫌になつて眉をしかめた。

「何故かね」だつて、人間はみんな極樂へ往くときまつてゐるんですから」
彼は一瞬、呼吸をとめた。ハタと沈黙してさも憎らしそうに、「私」をみつめた。

x

この春、ある文藝雜誌に發表された特異の作品——戦後文壇に独自の地歩を築いているT氏の「異形の者」のはじめの一こまでである。ところでもう少し拾ひ讀みしてみよう。
「人間はみんな極樂へゆくときまつてゐる」と言ふことで、墮獄こそわが生命の火と昂然とした學者を、一瞬にシユンとさせた、この「私」は加行僧の一人であつた時に、丁度その逆の立場でゴツンと障壁にぶつかつて、あわれまれたのである。「私」は本山に來泊して淨土宗を研究している——中國僧に會つて、極樂についての押問答をはじめた。「あの世の極樂なるものは絶対に嫌ひである」と筆問筆答をしてきたその「私」は鉛筆にギユツと力をこめて書いた。
「よろしい／＼」と中國僧はつぶやいてから、やさしく淋

しげに微笑した。「少年時代には何もわからぬものである。みな汝の如く考へるものである。しかし」と彼の僧は書いた。「汝もまたやがて極樂へとおもむくのである。」そして彼はその一行の言葉のかたはらに丁寧に傍線まで引いて見せた。

×

作者がこの作品で何を考えているかは、こゝではふれない。しかし「人間は極樂におもむく」という言葉が、古めかしい僧房で、また青や赤の灯の下で、ともに語られていることを、いま私たちは心にとめておきたい。

極樂とは。極樂のことを、すなはちアミダ佛の淨土を詳しく記した經典は、大無量壽經と阿彌陀經とである。その他の多くの經典にもそれぞれ述べられてはいるが、この二つが最も詳細であり、また精彩を放っている。法然上人はこのアミダ經と、大無量壽經・觀無量壽經とを以て「正依の經典」とされたが、アミダ經はこれら三部經の中でも字数が最もすくないところからも「小經」と呼ばれ、いまでも日常のおつとめには一番よく誦まれているお經である。

かつて釋尊が、祇園精舍にあつて、舍利弗らの諸々の佛弟子たちのために説かれた説法が、その内容とされているが、先づそこにはアミダ佛の淨土―極樂の莊嚴の有様が、まことに藝術味ゆたかに説き明かされてゆく。七寶の池は八功德の水を清澄にたゞえ、諸色妙光の蓮華は華咲き、七

寶の樹々、七寶の樓閣たがい相映じ、妙色の鳥は微妙の朗音を以て囀り、聞くものをして自らに念佛、念法、念僧の想ひを湧然として起さしめるものがある。アミダ佛は現にこゝにましまして、遍く一切を照らし一切を攝し給ふ。かゝる世界に生を受けるにはどうすればよいか。アミダ佛の大いなる誓願の故にたゞ至心にアミダ佛の名號を稱へることによつてそれを受けることが出来る。念佛の信仰を持して亂れぬことが、淨土への道であると説かれている。

×

この間ある會合で私は、東大工學部のM教授から原子力についての話を聞いた。先生は最近の米誌にのつている原子に關する寫眞をいろいろと我々にみせながら、われわれ素人にも分るように説いて下さつたのであるが、全てのものを作り上げている根源的な原子が、中心の原子核とその周りを一つ又はそれ以上廻轉している電子から成つていて、という。その寫眞―もちろんかゝる微視的な状態は、現わし得ないのでこの寫眞もひとつの模型的なものではあるがそこには橙色と淡青色とのいくつか粒のかたまりの核、その核を周つて、丁度土星の環の様に、平らに或は斜に交錯しながら廻轉している深い青色の電子の軌跡、―私は何かそこにほのぼのとした藝術的な香をさえ感じた。小人數の集りの座の落つきと、梅雨のあい間にふと訪れた静けさとそんな空氣も影響したかも知れない。しかし問題は藝術と

か雰圍氣とかを超えて、もつとも冷厳な科學、この現實の根源的構造にかゝはる近代力學の世界のことである。この目でとらえ、この手で感じることをさへ出来ない、ものなのである。しかもそれは動かし難い實在である。肉眼的現象を超え、しかも肉眼的現象を支配するものがそこにある。先生はわれわれの、素人じみた質問に答えながら、ふつと何か胸の中からしづかに流れ出すように、「實在ということの考え方が、いまこうした科學の世界で變りつゝあります」と言われたのだつた。

×

われわれはこの人生が短いからといつて、それを超えた何ものにも關心をもち得ないということとは正しいことではない。また自ら生きて見ることの出来ないものには、何らのふかい關心をよせることができないというのも正しいことではない。佛の世界、宗教的世界は、明らかに私たちの肉眼的世界を超えている。しかし、超えているということとは、無縁隔絶なのではない。その點でいえばもつともこの現實に喰ひ込んでゐる世界というか、この現實を包み活かし、働かせる、この現實にとつて根源的な世界なのである。だから淨土は或る意味では此の現實のわれわれの世界——此土と相表裏している。十萬億土の隔たりといひ、未來世といふ。空間を隔て、時間を隔てゝいるというが、すでに昔の信仰あつき人々の心はこのように歌つてゐる。

極樂淨土は一所、ひとところつとめなければほど遠し

われらが心の愚にて近きを遠しと思ふなり

「つとめなければ」ということに、その遠近の轉換の鍵がある。われらが心の愚であることの、人間の存在が有限であり、相對であることの自覺こそ、「つとめ」への轉換であり、その「つとめ」の立場において、極樂は娑婆と一分のすきもないものとなつてゆく。しかし、愚なる我に於て、いかなる「つとめ」の立場があるだろうか。有限であり、愚であるが故に、人生に苦惱しあるいは惑溺し、人生に堪えあるいは捨てる、——その弱さの故にたゞアミダ佛の救ひの手に自らを投げ入れるの他はない。至心に佛の大いなる誓願を信樂して、念佛の生活に入るの他はない。この信仰が、全てを轉換させてゆく。

×

明治の思想界に清新な信仰運動をおこした清澤滿之はその語録の中で次のように記している。

「嶺城老人來り問うて曰く、予、齡七十五に達せりと雖もなほ前途の希望甚だ明瞭なる能はず、予は如何と。答えて曰く、生も亦然り、死後は七珍萬寶の樂土ありて生すべきや、或は鼎鑊劍林の奈落ありて墮すべきや、その樂土奈落の有無も未だ確信する能はず、たゞ、念佛は極樂へ登るべき種なるや、地獄に落つべき種なるや總じて以て存知せず只よき人の教を信するのみ、とあるに信服す云々」

こゝには佛の大慈悲力に對する信仰がいかなるものにも勝る幸福であることを泌々と感じさせるものがある。法然上人の示された「唯念佛」の一路がそれである。

世にはさまざまの人がある。病床に余命短いことを悲しむもの、何事を企てゝも失敗の経験になやむもの、自らの内に到底、大いなるものを捉え得ないで苦しむもの、どのような些やかな幸福さえ、もはや失なわれた思ふ人にさえなほ一つの、もつとも廣い道が残されている。苦しむということの故、堪えてゆかねばならぬということの故に、そこにたゞ一つの道がある。即ちアミダ佛の大悲大慈の力に對する信を願ひ求めることである。アミダ經を誦んでゆくときに、終りに近く、「難信の法」という言葉が二度までも現われてくる。彌陀の教門は行じ易く、信じやすいと言われるのに何故であらうか。端的に云えば、アミダ佛の本願は、われわれ衆生をはるかに超えている。難信なるが故にたゞ念佛するの他はない。たゞ念佛せよとのよき人の教え法然上人の教えを、たゞ信じたのは親鸞上人である。そこには一切のとゞこほりが無い。

信仰をもつとは、あるいは難中の難かも知れない。しかし熱望する人には、至心に信樂せんとする人には、如何なる人にも、如何なる時にあつても容易に得られるものである。

アミダ經は、他の多くの經典もそうではあるが「如是我聞」――是の如くに我れ聞けり――という言葉で始まつている。たゞ讀み過すときには、之は何かお經の初まりの定まり言葉のように思ふて過すかも知れないが、こゝに深いはじめの教がある。ものごとを、素直に虚心に、あるがまゝに聞き、見ることは容易なようで、決し容易ではない。

佛の教をその説かるゝがまゝに「如是」に聞き、如是に信受して、後世の我々に傳えてくれた數々の佛弟子たちに感謝したい。

アミダ經は、「歡喜信受、作禮而去」――歡び信じ受けて、恭禮して去つた――という言葉でその全文を結んでいる。如是に聞くことによつてこの信受の歡喜がある。「如是我聞」に始まり、「歡喜信受」にいたるアミダ經を、この文字の間に記されているこの經典の聖なる一句一句を誦みつゞけてゆかれる方々にとつて、私のこのよろめいた一文は何等必要はありません。

アミダ佛は、われわれの昔から、そして今を通して、これから先も、端然として我々を見ておられる。孤心暮夜ひそかに、あるいは狂騒の巷に昂然と墮獄を喜ぼうとするものをも、やさしく淋しげに微笑しながら。

◇會友通信◇

◇合掌して讀む―私は菩提寺の傳通院から淨土を頂き早速拜讀いたしました。吉田先生の「悟る心悟らぬ心」、山本先生の「佛道身邊」、實に讀後、心に残るものを覚え、たゞ南無阿彌陀佛と合掌をいたしました。編集係へお禮のため一筆ペンをとりました。今後とも家庭人のよめる原稿をお願いします。そして愛讀者の増えることは少くとも現世の淨土化です。(東京・清水義忠)

◇口惜しい話―私の地方には各宗の寺が十一もありますのに、近ごろ他方から邪教とも言ふべき僧が入つてきて、墓の位置が家にさわるとか、佛壇の位牌がどうのと、迷信と考へられることをすゝめてまわる者があり、口惜しいことに思ひます。毎日朝六時半からの第二放送佛教の時間に、わが會淨土から、法然上人を語る放送を出來ぬものだろうか。(福井・竹澤元次郎)

◇考えてほしい話―淨土が大變よくなつて來ましたことは編集部の方々的一方ならぬ御苦心とかげながら喜んで居り、信徒の者にも回覽してありますが、今一段と御工夫を願ひたいところは一般信徒の佛典に對する基礎が乏しいという御考慮の下に、出來るだけ平易にわかり易く願ひしたいと思ひます。特に勤行解説はその感を深くします。(川崎市・吉水智承)

芝園だより

◇お盆月にちなんで、特集を試みた。坊間にもみる如く特集と誇號して似たり寄つたりの題目を並べたてるのは類を異にする本誌である。敢て看板をかゝげずとも、一讀おのづからに、その感のにじみ清涼の想ひのしみるよう、これが毎月の編集のひそかなる苦心。

◇會友の心からなる通信、投稿がこゝのところ活潑になつてきて嬉しい。出來るだけ本誌に掲載して心を同じくする人々に結び合つてゆきたいと思ひますが、何卒熱心な御投稿の一面會友の御紹介も願ひたい――淨土建立のために。

◇世の姿はまだまだ本誌が主張する世界には遠い。暴力否定の蔭に暴力があり、平和を叫ぶ裏に破壊がある。現實の風は肌荒い。しかしこうした荒煩の世界にも、一本の草花の美しさ、善さのあることを忘れてはならない。さゝやかでも、この美と善への感覺を失な

わぬ限り、私たちはそこに無限の安らひと生活勇氣とを見出すことが出来る。「淨土」こそはいま世の一隅を照す光である。(藤田)

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「淨土」 七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年六月二十五日印刷
昭和廿六年七月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田神保町三ノハ

印刷所 共立社印刷所

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

會員番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓(送料共)

浄土トラクト第三集豫告

誰にも親しめて分り易いお盆の話
興味ふかい民俗を描いたお盆の話
自然に信仰心が養われるお盆の話
正しい信仰が求められている。文書傳道こそ、それに
こたえる第一歩。お盆の施本に最適の書

佐藤 密雄 著

お盆とおぜがき

一部四圓
送料六圓

別表紙裝釘

◇送料一〇部以上十二圓、一〇部を増す毎に六圓増

但し五十部以上三五圓、百部以上當方負擔

◇二百部以上は希望申込により表紙に寺名刷込をいた
します。

申込所 東京都港区芝公園五ノ一〇

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

佛教儀式を現代に生かそう！

在來の法要に現代的センスなし
すべからく情味と悲哀とをこめ
聞く者をして心から慟哭せしめる
切々たる諷誦文をよむべし

新撰 諷誦文集

美麗鳥の子紙折本・謄
寫印刷・十種所收・一
冊二百圓・送料三十圓

難解冗長な在來のものを
平易にして而も感銘深きものと
本會苦心の結果成れる
本文集を是非御使用下さい

法話より魂に訴える力を持つ！

發行所 東京都品川区上大崎一丁目日本願寺内

新佛教青年會

振替東京八七六六一番

取次所 東京都港区芝公園五の十

法然上人鑽仰會